

Andrews Amalgam の諸特性に対する統語的分析

平塚哲郎

1. 導入

Lakoff (1974)は、通常は間接疑問縮約節と考えられる網掛け部分の節が主節動詞の項の位置に生起し、内部にある要素がその動詞の項のように働く(1)を観察している。

- (1) John invited **you'll never guess how many people** to his party. (Lakoff (1974: 321))

(1)の文は Andrews Amalgam (AA)と呼ばれ、網掛け部分は「推測はできないが多くの人」という太字部分 (people)を中心とした解釈を持つ。以降、Kluck (2011)に倣い網掛け部分を IC (interrupting clause)、de Vries (2012)に倣い太字部分をピボットと呼ぶ。AA の IC は主節からの c 統御が不可能である一方((2a))、ピボット自体は両方の節の主語から c 統御が可能であり((2b))、さらにピボットから主節への抜き出しが可能である((2c))。

- (2) a. * Every student_i bought **he_i didn't realize how many books** that day. (De Vries (2012: 163))
b. Every student_i was kissing, **no professor₂ could have imagined how many of his_{1/2} mistresses**. (Kluck (2011: 97))
c. Tolkien is the author Bob read **you can imagine how many books by**. (Kluck (2011: 93))

このように AA の IC は主節に対して不透明な領域である一方で、ピボット自体はあたかも両方の節の要素として振る舞っている。本研究は AA が示すこのような振る舞いに統語的な説明を与えるを試みる。

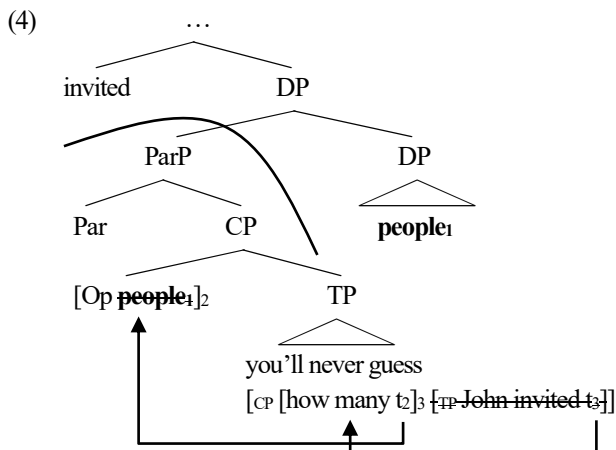
2. 提案と分析

(3a)の関係節主要部に含まれる himself は主節内の John と関係節内の Bill のどちらとも同一指示が可能である。このように、関係節主要部は主節と関係節のどちらの要素としても振る舞うという点で AA のピボットと共通している。よって AA が関係節の構造を持つと提案し、Saltzman (2019)が提案する関係節の派生を採用する。

- (3) a. John₁ bought the picture of himself_{1/2} that Bill₂ saw (Kayne (1994: 87))
b. John₁ bought [DP the picture of himself_{1/2}] [CP [DP Op picture-of-himself_{1/2}] that Bill₂ saw [picture-of-himself_{1/2}]]

(3b)では、関係節主要部 picture of himself が主節と関係節の両方にあり、関係節内の主要部が主節内の主要部との同一性により削除される。また、認可されない関係節主要部は LF で削除される。例えば(3)では himself が Bill と同一指示の場合、主節にある himself は先行詞である Bill に束縛されず認可されないため、LF で削除される。

(1)の AA は(4)の派生を持つ。まず IC 内で wh 句が移動し、関係節化のためにピボットが IC 内の CP 指定部に移動する。次にこの CP が de Vries (2012)が提案する Par 主要部と併合する。Par 主要部自体と Par に c 統御される要素は、Par 主要部より上位の要素からの統語操作等に不可視的となり、c 統御を受けない。よって Par 主要部の補部となった CP が c 統御などにおいて主節から不可視的となる。結果として出来上がった ParP が主節ピボットに左方付加し、主節の派生が進んで AA が完成する。



この構造によって(2a, b, c)の事実が説明可能となる。IC が Par 主要部の補部になっているため IC 主語は主節から統御が不可能であり((2a))、ピボットは主節と IC の両方に存在するためどちらの主語からも c 統御が可能であり((2b))、ピボットからの抜き出しは主節ピボットから行うことができる((2c))。

また、AA では how many 以外に what のような wh 句も使用することが可能である。

- (5) a. We ate **I don't know what**. (Matsuyama (2015: 78))
b. We ate [DP [ParP Par [CP [Op what₁]₂ C I don't know [CP t₂ [TP ...]]]]] what₁]

主節と関係節の両方がピボットである *what* を有しているが、間接疑問節を含む後者でしか認可ができない。しかし、Saltzman (2019)の提案に基づき、主節で認可されない *what* を LF で削除することでこの問題は解決される。¹

3. 間接疑問節 CP 指定部からの移動

間接疑問節 CP 指定部からの移動を含む文は容認されない。

(6) a. * Which dog_i do you wonder [t_i C_Q [John likes t_i]]

b. ??Which dog₂ do you wonder [[which picture of t₂]_i C_Q [John likes t_i]] (Epstein, Kitahara, and Seely (2015: 230))

本提案では、本来は非文を生じさせる間接疑問節 CP 指定部からの移動が起きている。この移動が許されるのは、ピボットの最終的な生起位置が CP 指定部からの移動前の位置と同じであるからという可能性がある。

Abe and Hornstein (2012)は島効果は顕在的な移動(語順に影響を及ぼす移動)が起こった時にのみ生じると提案している。例えば英語の右方節点繰り上げ構文では、第二等位項からの島を超えた移動が語順に影響を与えない場合は島効果が現れず、語順に影響を与える場合は島効果が現れ非文となる。

(7) a. [I know someone who wants to buy _], and [you know someone who wants to sell _], a copy of this manuscript.

(Abe and Hornstein (2012: 186))

b. * [a man who loves _ danced], and [a woman who hates _ went home] a book by Kafka.

(Bachrach and Katzir (2009: 289))

(7a)では、sell の補部位置から a copy of this manuscript が文末に移動するが、移動によって語順が変わっていないため島効果が現れない。(7b)では、hates の補部位置から a book by Kafka が文末に移動しているが、移動によって語順が変わっているため島効果が現れる。本提案では IC 内の動詞の後ろからピボットが移動するが、主節のピボットが発音されることで語順に変化がなくなっている。

(8) 移動前の位置 [CP I don't know [CP [Op **what**] [TP ...]]]

発音する位置 We ate [DP [ParP [Op **what**] I don't know t_i [TP ...]] **what**]

厳密には間接疑問節 CP 指定部のピボットと主節のピボットには移動の関係はないものの、「ピボットの発音位置が IC 内の動詞の後ろから変わっていないこと」が非文法性を示さない原因である可能性が考えられる。²

4. 結語

AA のピボットは主節と IC の両方にあり、主節のピボットに IC が関係節として左側に付加することで、AA の諸特性に説明を与えることに成功した。本提案は通常は禁じられているはずの疑問節 CP からの移動を伴うが、この移動が語順に影響がないため非文を生じさせないという可能性を示した。本提案が正しい限りにおいて、関係節主要部の認可システムの妥当性と、島を超える移動の回復効果に関する理論の拡張可能性が示唆される。

注釈

1. 紙面の都合上、AA の先行研究は割愛するが、AA を関係節とする分析は Tsubotomo and Whitman (2000)も提案している。また、Kluck (2011), de Vries (2012), Matsuyama (2015)も Par 主要部による IC の導入を仮定している。
2. AA では間接疑問節縮約が義務的であるという事実が観察されている(Kluck (2011))。本提案では削除がない場合はピボットの最終的な語順が変化し違反が回復しないため削除が義務的であるという分析が可能かもしれない。

参考文献

Abe, Jun and Norbert Hornstein (2012) "'Lasnik-Effects' and String-Vacuous ATB Movement," *Ways of Structure Building*, ed. by Myriam Uribe-Etxebarria and Vidal Valmala, 169-205, Oxford University Press, Oxford. / Bachrach, Asaf, and Roni Katzi (2009) "Right-Node Raising and Delayed Spell-Out," *Interphases: Phase-theoretic Investigations of Linguistic Interfaces*, ed. by Kleanthes Grohmann, 283-316, New York, Oxford University Press. / Epstein, Samuel David, Hisatsugu Kitahara and T. Daniel Seely (2015) "What Do We Wonder Is Not Syntactic?," *Explorations in Maximizing Syntactic Minimization*, 222-240, Routledge, New York. / Kayne, Richard S. (1994) *The Antisymmetry of Syntax*, MIT Press Cambridge, MA. / Kluck, Marlies (2011) *Sentence Amalgamation*, Doctoral dissertation, University of Groningen. / Lakoff, George (1974) "Syntactic Amalgams," *CLS* 10, 321-344. / Matsuyama, Tetsuya (2015) "The Syntactic Structure of Wh-Syntactic Amalgams," *English Linguistics* 32, 78-101. / Salzmann, Martin (2018) "A New Version of the Matching Analysis of Relative Clauses," *Reconstruction Effects in Relative Clauses*, ed. by Manfred Krifka and Mathias Schenner, 187-224, Mouton de Gruyter, Berlin. / Tsubotomo, Atsuro and John Whitman (2000) "A Type of Head-In-Situ Construction in English," *Linguistic Inquiry* 31, 176-183. / Vries, Mark de (2012) "Unconventional Mergers," *Ways of Structure Building*, ed. by Myriam Uribe-Etxebarria and Vidal Valmala, 143-166, Oxford University Press, Oxford.